

No	質問	回答
Q1	落差工の天端から既設の吐出口まではどのくらいあるのか。	約2.2mです。
Q2	落差工を整備した場合、既設の吐出口に対する影響はあるのか。洪水時は水位が上がるのは当然なので排水口は埋まるだろうが、平常時はどうなるのか。また、洪水時は下水側に河川水が逆流するのではないか。	整備後であっても吐出口の平常時水位に変動はないため、影響はありません。また、現時点で吐出口にゲート等が設置されていないこともあり、洪水時に水位上昇しても問題ないと考えます。
Q3	この写真は今日撮影したものである。工事後はこの写真と同様の水位となることでよいか。	検証した平常時水位では施工前と施工後では変わりません。
Q4	資料P7の河床の経年変化についてであるが、私の記憶だと昭和59年頃にすでに護岸の矢板は見えていたと記憶している。河床低下が進んでいるのか。	過去の測量結果に基づいてこの資料を作成している。平成4年頃に護床工といってブロックを川底に敷き詰める工事をしているので、河床低下の変化が落ち着いているが、経年の測量結果では河床低下が進んでいる。
Q5	6.0k付近の洪水時は水位が上がるのか。	資料P20のとおり5.9kの河床を1.6m高くすることにより、以降の上流区間の影響範囲において流速は下がりますが水位は上昇します。
Q6	現状より水位が上がる工事を私は認められない。令和元年度の台風のような雨は頻繁に起きているのに、水位を上げるのではなく、下げる工事をすべきではないか。護岸なんてものは消耗品でありその都度修繕すればよいと思う。	6.0k地点では洪水時水位の場合は堤防から約1.9m、令和元年度東日本台風のピーク時の水位は堤防から約0.9m低いところまで水位が上昇しますが、黒目川の計画高水位（HWL）に対して余裕高を60cm以上確保することとなっています。この余裕高以上であることから、洪水時に安全に流れると考えています。
Q7	令和元年度の台風で余裕が0.9mしかないのは怖いと感じる。もっと河床を下げられないのか。	先ほどの説明でも申し上げましたが、流速を下げる効果と水位のバランスを考えて計画しており、これ以上河床を下げることは考えておりません。
Q8	私がここに来てから30年くらいにはなるが、この川で洪水が起きたことは一度もない。工事は必要なのか。	先ほどの説明でも申し上げましたが、令和元年度の東日本台風と同規模やそれ以上の規模の災害が起これないとは限らないので、予防保全の観点からも護岸が大規模に崩れないように対策を講じる必要があります。
Q9	資料P25の工事手順に関してだが、左岸側の工事をするのにどうして右岸側から工事するのか。工事期間中の負担を右側だけが負うのはおかしいではないか。わざわざ右岸側からではなく左岸側の工事は左岸側から施工すればよいのではないか。搬入路として自社の前を一日に何台も車両が通行されては困る。	説明の際に大型の建設重機の話はしましたが、例として資料P25の横断図②に記載しているような大型のクレーンは分解して現場に搬入しますが、トレーラークラスのけん引車でなければ運搬できないため、おのずと運搬経路は限られます。対岸側（左岸側）からの進入を検討しましたが、川沿いの通路に至るまでの道が狭く、車両が曲がれないことから、搬入路としては資料に書かれた箇所から搬入する必要があります。
Q10	この工事は、これまでの説明で搬入路について、いつどの時間に何台通行するといった説明が一切ない。下流の工事（護岸の修繕工事）は1週間以上前に調整しているがなぜか。	工事着手は今年の11月を予定しています。車両の搬入出など詳細な予定は工事を行う下請業者や専門業者などと調整することで初めてお伝えできるものです。詳細が決まり次第調整させていただきたい。
Q11	この工事は既設の矢板が倒れないように（堤防が壊れないよう）するのが目的か。	この工事は、お話のとおり矢板護岸の倒壊頻度を抑え、出水時の二次被害を防ぐためです。荒川や黒目川も下流側は土を盛っている築堤と呼ばれており、工事箇所付近は現地盤が高いので川の部分を掘り込んでいる掘込河道と呼ばれる形状をしています。掘込河道は築堤部と異なり、破堤することはありません。が資料P8の写真のとおり、鋼矢板が傾き倒れてしまうと、修繕工事は濁水期でなければできないため、ブルーシートで覆うなどの応急的な対応しかできません。その間は護岸が壊れたまま残ることから大きく堤防が抉られるなどの二次被害を防ぐ目的もあります。